

(様式 1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成29年度委託事業完了報告書【実践地域】

番号	36	機関名	徳島県教育委員会
----	----	-----	----------

実践地域名	拠点校名	児童生徒数
徳島県	県立川島中学校・高等学校	651

※ 児童生徒数については、平成30年3月現在、拠点校に在籍する児童生徒数を記述する。

○ 実践研究の具体的内容

本研究の拠点校である県立川島中学校・高等学校は、併設型中高一貫校であり、中高一貫教育を活かし、次の3点について実践研究を行った。

- ①「生徒の実態に応じた適切な言語活動による授業改善」
- ②「中高一貫教育の特性を活かして学校全体で協働する指導体制の構築」
- ③「地域との連携による多様な学びの場における言語活動の実践」

これらはいずれもアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善においては重要課題であるため、県教育委員会は、県内の中学校や高等学校との連携を支援し、拠点校における実践研究をモデルとして、研修会や発表会等の様々な機会を県内全域への普及を図った。

具体的な取組としては、次のような協議会、研修等を行った。

1 公開授業及び研究協議会

県立川島中学校・高等学校において、県教育委員会教科担当指導主事、公立中学校・高等学校の学力向上推進員等が参加し、公開授業・研究協議会を行った。

本年度は、特に、国語、社会・地理歴史・公民、数学、理科において研究授業を行い、研究成果を共有し、協議を行った。社会・地理歴史・公民、数学、理科については、拠点校の特性を生かし研究協議会を中高合同で行い、拠点校における研究授業・公開授業への参観、取組についての協議、指導助言等を行った。

研究協議会では、参加校でのアクティブ・ラーニングの実践事例、授業実践での工夫点、実践上での課題点など幅広く情報交換を行うことができた。



2 高校と大学の教育内容接続のための情報交換会（12月）

高校と大学の連携や接続について意見交換を行うことにより、課題解決の方向性を模索し共有すること等を目的に開催している。本年度は、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～高大の実効ある連携～」をテーマに開催した。

アクティブ・ラーニングに関する分科会では、「アクティブ・ラーニング実践における課題等について」をテーマに、高校教員と大学教員の間で活発な情報交換を行った。

各校のアクティブ・ラーニングによる授業改善の取組や課題について、高大接続の視点から情報交換を行い、大学の教員からは、生徒の意見を引き出す工夫などについてなどのアドバイスを聞くことができた。この分科会を通じて、学校全体の取組としていくことの大切さを感じたとの意見も見られた。



3 「あわ（OUR）教育発表会」（12月）

本県では、創意工夫を生かした特色ある教育活動を積極的に展開する学校がポスターセッションを行い、その成果の普及を進めている。本年度、県立川島中学校・高等学校は「中高が取り組む主体的な学びの実践～アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善～」と題して、成果発表を行った。

拠点校からは、校内の教員間で話し合い、統一性をもって進めたこと、校内研修を行って研鑽を積んだこと、授業ではホワイトボードを使用していること、授業の目的・目標や流れを説明していることなど、他校の参考となる発表であった。

本発表会は、県内の幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校が一堂に集い、他校種の取組等を知る有意義な機会となっている。



4 県立総合教育センターでの研修

県立総合教育センターでは、県内全公立小・中・高・特別支援学校の教員を対象に、指導力向上講座等を開講している。本年度は「主体的・対話的で深い学び」をテーマとしたセミナーを開催した。表1は、本年度開講したセミナーの一例である。

表1 土曜セミナーの講座の一例

校種	教科	内容
小学校	算数	算数科の不断の授業における主体的・対話的で深い学びの実践
小・中学校	家庭科	これから求められる家庭科の授業づくり
高等学校	理科	ルーブリックを用いた課題研究の指導と評価の方法

高等学校	歴史	歴史的思考力・判断力・表現力等を育む授業実践と評価の方法
小学校	社会科	「社会科の授業づくり」～社会的判断力育成をめざした授業の展開～
高等学校	国語	『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて
高等学校	数学	高校数学の授業におけるアクティブ・ラーニング入門
中学校	数学	数学の授業・活用問題作成
小学校	国語	『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて
小・中学校	理科	理科実験の基礎・基本

○ 実践研究の成果とその分析

県内の公立学校においては、授業改善等による学力向上を目指し、学力向上推進員を中心とする学力向上検討委員会を設置し、「学力向上実行プラン」を作成・実施して各校、生徒の実態に応じた様々な取組を行っている。

アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善については、高等学校においては、高大接続改革の進展に伴い、校内外の研修会に積極的に参加する学校が増え、学校をあげての実践も広まりつつある。

拠点校において、講義式一斉授業から、生徒が活動する生徒主体の授業へと転換を図ることで、生徒の学習への姿勢が以前よりも能動的となり、「主体的な学び」が少しずつ実現している。

また、ホワイトボードを活用した授業実践では、ペアワークやグループ学習などの小集団学習を積極的に取り入れていることにより、生徒が互いに協働して学ぶ機会が増え、「対話的な学び」も少しずつ実現している。

拠点校では、アクティブ・ラーニングの効果を検証するために、平成28年度と平成29年度に合計3回のアンケート調査を実施している。高校生に焦点を当ててみると、全ての質問において肯定的な回答の割合が増加しており、実践研究に取り組んだ成果が現れている。

拠点校で実施した公開授業・研究協議会は、県下の中学校・高等学校から多数の教員の参加があった。日頃の研究成果を発表する機会となり、研究協議では新たな試みとして中高合同で行った教科もあった。研究協議では、アクティブ・ラーニングの実践事例、問題設定の仕方、話し合っている場面で終わっているなどの課題点など、今後の各校での取組に役立つ協議がなされた。

拠点校における生徒対象の調査では、「疑問点を自分で調べるなどして、積極的に問題を解決しようと努力している」では、「思う」と「やや思う」を合わせた肯定的回答は、高校生では第1回49.3%から第3回では59.1%であり、9.8ポイント増加している。

また、「目標達成後、新たな考え方や行動を起こし、さらにステップアップできるようにしている」では、「思う」と「やや思う」を合わせた肯定的回答は、高校生では第1回36.6%から第2回では52.5%であり、15.9ポイント増加している。表2は、この2つの質問の肯定的回答の割合を示したものである。

表2 2つの質問における肯定的回答の割合

質問	第1回	第3回	比較
疑問点を自分で調べるなどして、積極的に問題を解決しようと努力している	49.3%	59.1%	+9.8 ポイント
目標達成後、新たな考え方や行動を起こし、さらにステップアップできるようにしている	36.6%	52.5%	+15.9 ポイント

本県では、毎年度、公立高等学校の1年生及び2年生を対象に、「生徒の意識等に関する調査」を行っている。「授業について、あなたはどう思うか」に関して、「授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う」の質問に対して、1年生では、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の肯定的回答の割合は、平成28年度が59.9%、平成29年度が65.3%であり、5.4ポイント増加している。また、2年生では平成28年度が67.6%、平成29年度が71.1%で3.6ポイント増加している。表3は、本質問における肯定的回答の割合を示したものである。

表3 質問「授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う」における肯定的回答の割合

学年	平成28年度	平成29年度	比較
1年生	59.9%	65.3%	+5.4 ポイント
2年生	67.6%	71.1%	+3.6 ポイント

また、「授業の中で、わからないことがあったらどうしていますか」に関して、「友人・先輩にたずねる」の質問に対して、1年生では、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の肯定的回答の割合は、平成28年度が77.8%、平成29年度が78.8%であり、1.0ポイント増加している。また、2年生では平成28年度が75.7%、平成29年度が77.0%で1.3ポイント増加している。表4は、本質問における肯定的回答の割合を示したものである。

表4 質問「友人・先輩にたずねる」における肯定的回答の割合

学年	平成28年度	平成29年度	比較
1年生	77.8%	78.8%	+1.0 ポイント
2年生	75.7%	77.0%	+1.3 ポイント

拠点校における研究成果や様々な機会を通して、アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導

方法の改善について研修等を行ったことにより、成果が表れつつあることが示された。

○ 実践研究成果の活用方策

実践研究の報告書は、県内全ての中学校、高等学校、特別支援学校及び大学等に配布するとともに、拠点校にホームページにも掲載し、活用しやすいようにする。

「学力向上推進員研修会」、「教育課程研究集会」、「高大接続情報交換会」、「あわ（OUR）教育発表会」等において実践研究の報告をするとともに、積極的に広報し拠点校の成果の活用を促す。

また、県教育委員会が行っている学校訪問では、毎年全ての高等学校を訪問し、全体協議会の他に研究授業及び授業研究会を行っている。研究授業では、アクティブ・ラーニングの視点による授業も多数見られた。学校訪問の際の研究授業及び授業研究会を通して、拠点校の研究成果を紹介するとともに、それを踏まえて適宜、指導助言に活用し、本県におけるアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善を促進していく。

(様式2)

「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善に関する実践研究

平成29年度委託事業完了報告書【実践地域】

番号	36	機関名	徳島県教育委員会
----	----	-----	----------

拠点校名	徳島県立川島中学校・高等学校
------	----------------

1. 拠点校として実施した研究内容

(1) 生徒の実態に応じた適切な言語活動による授業改善

- ①平成27年度から言語活動を充実させるためにホワイトボードを活用したペア・ワークやグループ活動を授業に取り入れてきたが、本年度もその継続性を重視した。中高とも生徒用ホワイトボード（A3サイズ）、発表用ホワイトボード（A2サイズ）を整備し、授業や講演会、学年単位の集会でも活用している。

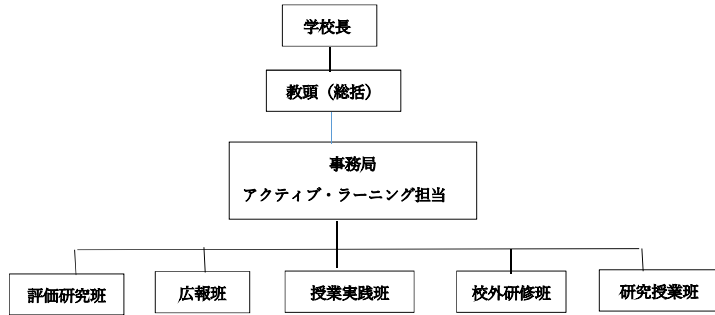


- ②平成29年度は国語・社会（高校は地理歴史・公民）・数学・理科を重点科目として研究授業や公開授業を行った。平成29年10月30日（月）には校内の授業研究会を実施し、徳島県教育委員会や徳島県立総合教育センターの指導主事から指導を受けた。また、平成30年2月8日（木）に実施した「アクティブ・ラーニング公開授業及び研究協議会」においては県内の中高教育関係者が65名参加し、5つの研究会（分科会）で熱心な協議が行われ、各校の取組状況も含めた情報交換の場となった。
- ③1月下旬から2月上旬にかけて生徒及び教職員対象のアンケートを実施し、これまでの授業改善の成果および課題について分析を行った。

(2) 中高一貫教育の特性を活かして学校全体で協働する指導体制の構築

- ①研究授業や公開授業の後の研究会は各教科ごとに中高合同で実施し、異なる校種の教員が多様な意見を交換し合いながら授業改善を進めてきた。また、校内研修会も合同で開催し、意識の共有化を図った。
- ②月ごとに開催される中高一貫推進委員会で中高それぞれの取組状況や研修計画について協議を行い共通理解を図った。
- ③校務運営組織の中にアクティブ・ラーニング運営委員会をおいて、中高の役割分担を明確化し、事業の実施と計画の修正を行った。

アクティブ・ラーニング校内推進委員会



④中高一貫の特性を活かすという観点から国語、英語、数学の強化について高校の生徒が中学生に教えるスペシャル・アプローチという取組を行っている。



スペシャル・アプローチ

(3) 地域との連携による多様な学びの場における言語活動の実践

文化祭を地域に開放することで、展示や発表を通じた言語活動を、広く地域住民に行うことができた。鴨島支援学校の体育祭、文化祭にボランティアとして生徒が参加し、歌やダンスを披露するとともに介助等の活動を通して、言語活動の重要性を学んでいる。新たな取組として高校生が市内の小学校へへの出前講座を実施し、部活動で学んだ技術や知識を教えることで自らのコミュニケーション力を高めている。

2. 具体的な取組状況

(1) 研究授業・公開授業

学期ごとに校内においては各教科で授業見学を行い、そのうち1回は中学校から高校、高校から中学校への授業見学を行った。また、事業の実施にともない、平成28年度から徳島県教育委員会及び徳島県立総合教育センターの指導主事を招いての研究授業、県内の中高関係者への公開授業を年2回開催している。

(2) 中高一貫教育の特性を活かして学校全体で協働する指導体制の構築

- ①研究授業や公開授業の後の研究会は教科ごとに中高合同で実施し、異なる校種の教員が多様な意見を交換し合いながら授業改善を進めてきた。また、校内研修会も合同で開催し、意識の共有化を図った。
- ②月ごとに開催される中高一貫推進委員会で中高それぞれの取組状況や研修計画について協議を行い共通理解を図った。
- ③校務運営組織の中にアクティブ・ラーニング運営委員会をにおいて、中高の役割分担を明確化し、事業の実施と計画の修正を行った。

◆高等学校（平成29年度）

授業者	科目	実施HR	実施日	単元
平岡 実紗	コミュ英 I	4 3 HR	6月28日(水)	LESSON2
平岡 実紗	コミュ英 I	4 3 HR	10月6日(金)	LESSON4
佐藤 智洋	数学II	5 5 HR	6月23日(金)	軌跡と領域
木村 大志	美術 I	41, 42HR	9月20日(水)	魂から削り出す
吉田 一貴	数学 I	4 5 HR	6月22日(木)	2次関数のグラフ
吉田 一貴	数学II	41, 42HR	10月30日(月)	三角定数の加法定理
尼寺 清人	物理	6 1 HR	10月30日(月)	万有引力
山根 浩明	国語総合	4 3 HR	10月30日(月)	徒然草
石川 亜紀	世界史 B	51, 52HR	10月30日(月)	中国の古典文明
小川 勝幸	地理 B	53, 54, 55	2月8日(木)	世界のエネルギー・鉱産資源
工藤 悦美	化学総合	4 1 HR	2月8日(木)	酸と塩基
山根 浩明	国語総合	4 3 HR	2月8日(木)	古今和歌集
澤田 愛美	数学A	4 2 HR	2月8日(木)	整数の性質

高校1年生 国語（「国語総合」）

高校2年生 地理歴史（「世界史 B」）



◆中学校（平成29年度）

授業者	教科 (科目)	実施HR	実施日	単元
山城 裕貴	社会	1 2 HR	10月30日(月)	北アメリカ州
片岡 弘己	理科	3 1 HR	10月30日(月)	物体の運動
中川 博之	社会	3 1 HR	2月8日(木)	安心して暮らせる社会
山野井貴子	数学	3 2 HR	2月8日(木)	図形と計量
尾嶋 麻子	国語	1 1 HR	2月8日(木)	指示する語句と接続する語句
安部 恭美	理科	2 1 HR	2月8日(木)	電流の性質とその利用

中学校・授業風景



(3) 教員への研修

授業改善を行う上で、他校の取組状況を把握したり、研究協議会等で情報交換することは大切である。平成 29 年度も先進校視察や県外研修会等への参加を積極的に行った。

※平成 29 年度の研究会参加一覧

○授業改革セミナー（大阪）H29.8.8 主催：日本教育新聞

○アクティブ・ラーニングフォーラム（東京）H29.8.26,27

主催：（財）アクティブ・ラーニング協会

○アクティブ・ラーニングフォーラム（徳島）H29.11.18 主催：徳島大学

○次世代教育推進セミナー（東京）H30.2.23

主催：教育支援機構次世代教育推進センター

○横浜国立大学教育学部付属横浜中学校研究発表会 H30.2.23,24

主催：横浜国立大学教育学部付属横浜中学校

○その他、県立学校公開授業・研究会（城ノ内高、城北高、脇町高など）

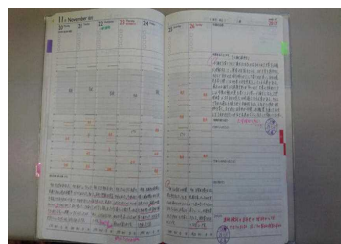
○平成 29 年度先進校視察（京都市 西京中・高） H29.12.1,2



また、12月12日（火）には独立行政法人教職員支援機構次世代教育推進センター研修協力員の下木美香先生を招き、「実践を通してアクティブ・ラーニングを考える」をテーマに校内研修会を実施した。

(4) 手帳の活用

主体的に学ぶ態度を育成するため、高校1、2年生に能率手帳を配布した。学びのプロセスを残し、ポートフォリオとしての活用を目指している。



(5) 成果発表

徳島県教育委員会が主催する「あわ（O U R）教育発表会」が12月26日（火）に徳島県総合教育センターで開催された。県内の教育関係者を対象としたこの研究発表会において、本校は中高合同で「中・高が連携して取組む主体的な学びの実践」をテーマに、ポスターセッションを行い、これまでの研究成果と課題を発表した。

(6) アンケートの実施

ホワイトボードを活用したアクティブ・ラーニングの効果を検証するために、中高の全校生徒を対象にアンケートを実施し、これまでの成果について分析を行った。

※アンケート実施日 第1回（平成28年10月24日） 第2回（平成29年2月9日）
第3回（平成30年1月18日）

①アンケート内容

【あなた自身が、できているかどうかについて教えてください】

番号	質問項目
1	自分が興味関心を持っている分野について、積極的に調べ記録している。
2	自分が興味・関心を持っていない分野の情報についても、耳を傾けている。
3	普段、新聞を読んだり、ニュースを見たりしている。
4	収集した情報を比較し、要約（まとめる）することができる。
5	収集した情報を分析する（なぜそうなっているかを考える）ことができる。
6	収集した情報をもとに予測を立てることができる。
7	疑問点を自分で調べるなどして、積極的に問題を解決しようと努力している。
8	目標を設定したら、期限内に間に合うように逆算して計画を立てることができる。
9	自分の目標達成度を客観的に分析し（なぜそうなっているかを考える）、自己評価ができている。
10	目標達成後、新たな考え方や行動を起こし、さらにステップアップできるようにしている。

【ペア・ワークや班活動の際、できているかどうかについて教えてください】

11	自分の考えを周囲の人に適切に伝えることができる。
12	相手の意見をよく聞き、理解して自分とは異なる価値観を尊重することができる。
13	班の仲間とともに、与えられた課題解決のために、さまざまな視点から問題を見つけ出そうと頑張っている。
14	課題解決に取り組むとき、自分の役割を見つけ行動できる。
15	班活動中に、班の目標が達成できないとき、新しい提案をすることができる。

②アンケート結果（高校生）

回	回答	設問 1	設問 2	設問 3	設問 4	設問 5
第 1 回	思う・やや思う	65.0%	32.7%	54.9%	27.8%	31.4%
	あまり思わない・思わない	35.0%	67.3%	45.1%	72.2%	68.6%
第 2 回	思う・やや思う	75.6%	44.5%	65.3%	39.0%	39.0%
	あまり思わない・思わない	24.4%	55.5%	34.7%	61.0%	61.0%
第 3 回	思う・やや思う	76.1%	46.4%	68.5%	44.6%	45.3%
	あまり思わない・思わない	23.9%	53.6%	31.5%	55.4%	54.7%

回	回答	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10
第 1 回	思う・やや思う	33.2%	49.3%	39.8%	34.2%	36.6%
	あまり思わない・思わない	66.8%	50.7%	60.2%	65.8%	63.4%
第 2 回	思う・やや思う	40.6%	59.4%	48.1%	42.9%	45.1%
	あまり思わない・思わない	59.4%	40.6%	51.9%	57.1%	54.9%
第 3 回	思う・やや思う	47.3%	59.1%	54.0%	50.8%	52.5%
	あまり思わない・思わない	52.7%	40.9%	46.0%	49.2%	47.5%

回	回答	設問 1 1	設問 1 2	設問 1 3	設問 1 4	設問 1 5
第 1 回	思う・やや思う	65.9%	75.9%	69.2%	63.9%	34.3%
	あまり思わない・思わない	34.1%	24.1%	30.8%	36.1%	65.7%
第 2 回	思う・やや思う	68.8%	84.1%	69.8%	66.2%	44.5%
	あまり思わない・思わない	31.2%	15.9%	30.2%	33.8%	55.5%
第 3 回	思う・やや思う	71.6%	85.3%	74.6%	74.2%	51.2%
	あまり思わない・思わない	28.4%	14.7%	25.4%	25.8%	48.8%

3 現状と課題（今後の方向性）

これまで3回のアンケート結果から考察すると、高校において顕著な効果が見られる。すべての項目で第1回と比較すると「思う・やや思う」の数字は5～15ポイント伸びている。特に設問4～6の「収集した情報を比較し、分析・予測することができるようになった」とする数字が段階的に上昇した。授業実践に取り組むまでの講義形式の一斉授業から生徒の活動を重視する授業

への転換の成果と言える。平成27年度からホワイトボードを活用したペア・ワークやグループ活動に積極的に授業に取り入れてきたが、学びの形態や質を大きく変容させ、生徒同士が互いに協働して学ぶ機会が増え、「対話的な学び」が少しずつ実現している。

また、講義形式の一斉授業から、生徒の活動を重視する主体的な学びへの転換を図ることで、生徒の学習態度が以前よりも能動的になった。しかし、設問15の「班活動中に、班の目標が達成できないとき、新しい提案をすることができる」という項目については、第1回アンケートの数字からみるとおよそ14ポイント上がってはいるが、「思う・やや思う」の数字としては51.8%と他の項目よりも低い。まだまだ学んだ知識を関連づけて新たな知識を生み出し、新たな学びを展開するなどの「深い学び」まで発展しているとは言えない。生徒はホワイトボードの活用にとらわれて、自ら課題を発見して解決するという目標を忘れがちになっているところに、大きな課題が残されている。さらに、ハード面での制約はあるが、ホワイトボードだけでなくICTを活用したアクティブ・ラーニングへの取組も今後の大きな課題である。

教員については、ホワイトボードを活用した授業改善に取り組み、意識の変容が見られるようになった。県内外の研修会や研究会に積極的に参加して情報収集を行うとともに、自らも研究授業を実施し、他の教員から指導や助言をもらいながら授業改善に取り組んでいる。しかし、評価という視点から見ると、十分な取組ができているとは言えない。次年度以降の大きな課題である。